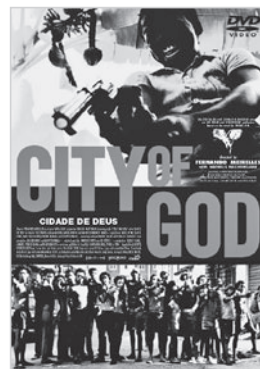


『シティ・オブ・ゴッド』

2002年／ブラジル／フェルナンド・メイレルス監督作品

語り尽くせない too much な傑作

会員 吉田 譲二 (66期)



『シティ・オブ・ゴッド』
DVD 発売中
価格：1,219円(税抜)
発売元：アスミック・エース
販売元：KADOKAWA 角川書店
© 02 Filmes curtos Ltda. and
Hank Levine film GmbH 2002.

1 私が執筆を依頼されたとき、嬉しい反面、一つの映画を選ぶことなんてできるのだろうかと思いを抱えてしまった。案の定、なかなか候補を絞り切れなかったのだが、観たことも聞いたこともない人のほうが多いだろうと思われる映画にしようという視点から、やっとの思いで本作に辿り着くことができた。

2 本作は、1960年代後半、「シティ・オブ・ゴッド」と呼ばれたブラジル・リオデジャネイロのスラム街を舞台に、暴力・ドラッグそして貧困が日常に溶け込んだ子ども達の生き様をリアルに描いたクライムドラマである。日本でいえばまだ小学生低学年くらいの子供達が銃をバンバンぶっ放し平然と殺人や強盗をしている日常で、一人の少年があるホテル強盗事件をきっかけに、“リオ最強のワル”としてギャングのボスにのし上がっていくのであるが、対立するギャングとの抗争が激化していき、衝撃の結末へと話が進んでいく。

3 私は、弁護士になる前、映画会社で数年間働いていたのであるが、当時、本作の続編又はスピンオフ(派生作品)とされるTVシリーズの製作が始まったという話を聞きつけ、そのTVシリーズの日本でのDVD化権の買い付けを検討するための参考資料として観たのが本作との出会いであった。そのときの衝撃は今でもはっきりと覚えており、ストーリー展開・映像・音楽全てにおいてそれまでの私の映画観を覆すといっても過言ではないくらいのインパクトがあった。

とにかく、映像と音楽のコラボレーションがめちゃくちゃカッコいい。スタイリッシュで歯切れのよい映像

とテンポのよいストーリー展開に、ブラジルの陽気なサンバが絶妙にマッチしている。

また、本作は、写真家を目指す一人の少年の視点から物語が綴られていくのだが、いくつかに分けられた物語がオムニバスのように絡み合いながら最終エピソードへと繋がるストーリー展開は秀逸で、観る者をヒートアップさせながら、130分という尺の長さを全く感じさせることなくあっという間にクライマックスへ連れ込むようなスピード感があり、観終わったときには、頭の中でアドレナリンがたままり、若干の疲労感を感じながらしばらくその場を動けず呆然としてしまうような、何ともいえない感覚に包まれるのである。

本作は、貧困の中で生きるために犯罪に手を染めていく子ども達という重大な社会問題をバックボーンとしているが、子ども達の力強さや彼らの突き抜けるような明るさが前面に押し出されているため、ときに貧困の残酷さを感じる場面はあるものの、悲壮感は一切感じさせず、むしろ清々しい気分させてくれる映画である。

4 執筆をするにあたり、10年ぶりくらいに本作を観たのだが、初めて観たときの衝撃が全く色あせていないどころか、最初のときとはまた違った感動を与えてくれた。

映画評論家でも何でもない私が言うのもおこがましいが、「いい映画」の定義の一つとして、何度観ても感動が色あせず、観る度に違った印象や思いを抱かせてくれる映画というものがあると思っている。人間と一緒に成長していく映画とでも言おうか。

本作は、そのような映画の一つであり、興味を持たれた方は是非一度ご覧になっていただきたい。